

将来目標と職業選択活動との関係

—生徒・進路指導への示唆—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 鈴木 高志¹⁾・村上 達也²⁾

筑波大学人間系 櫻井 茂男

The relation between future goals and career selection activities: Suggestions for student guidance and career guidance

Takashi Suzuki and Tatsuya Murakami (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study develops a "Future Goals Scale for College Students" in order to measure aspirations based on Goal Contents Theory which is an aspect of Self-determination Theory (Study I) and investigates the relation between future goals and career decision activities. The results indicate that intrinsic goals are positively related to adaptive career decisions. That is, intrinsic goals appear to foster and strengthen concrete career images, and lead to more mature career decisions that stem from identity and confidence towards one's life. In contrast, the results concerning extrinsic goals were ambivalent. Thus, on the one hand, the results suggest that extrinsic goals are not related to career interests and mature career decisions, while, on the other hand, extrinsic goals are also related to confidence towards one's life. The significances of these results are discussed.

Key words: future goals, student guidance, career guidance

問題と目的

生徒・進路指導において教員は、学生および児童生徒に対して将来の人生の目標として、どのようなものを目指すよう促すべきなのであろうか。

教員の視点から見れば「教育」、学生および児童生徒の視点から見れば「学習」という行動には、「自分の将来のため」という将来展望が本質的要素として含まれている (Husman & Lens, 1999)。このことから、生徒・進路指導と将来の目標との関係を明らかにすることは大きな意義を持つといえよう。この点に関して、例えば「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(文部科学省、

2004)は、キャリア教育(進路指導)を、児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育のことであると定義している。また、2007年度に改正された学校教育法において、中学生・高校生にとって「望ましい勤労観・職業観の形成」や「学ぶことと働くことの意義の理解」が特に重要な目標とされている。さらに、あるべき生徒指導の在り方をまとめた「生徒指導提要」(文部科学省、2010)においても、生徒指導の積極的な意義の一つとして「児童生徒自ら現在および将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」ことが指摘されている。

以上から、第一に「望ましい」人生の目標を目指した勤労観や職業観を持つように指導することを通じて、学習と働くこととの関係性を理解させること、第二に学習と働くこととの関係性を理解することで学習意欲を高めて最終的な進路選択において各自

1) 現所属は、高知工科大学

2) 日本学術振興会特別研究員

が自己実現を図れるような自己指導能力を育成すること、この二点が本邦における生徒・進路指導において、教員が学生および児童生徒に促すべき内容であると考えられる。

この「望ましい」人生の目標を含め、学生および児童生徒が将来の人生全般に対して有する目標を「将来目標」と呼ぶと、本邦の生徒・進路指導において目指されるべき将来目標の条件は、それぞれの観点から以下の三点に整理することができる。(1)「生きる力」(文部省, 1996)の不可欠の前提条件である健康、特に精神的健康に寄与すること、(2)生徒指導の観点から、現在行っている学習への動機づけを高めること、(3)進路指導の観点から、適切な進路(職業)選択および就業に結びつくことである。

上述した、本邦の生徒・進路指導において目指されるべき将来目標の条件に対して、Kasser & Ryan (1993, 1996)などにより提唱された「自己決定理論(self-determination theory)」(Deci & Ryan, 1985, 2000)のミニ理論「目標内容理論(goal contents theory)」からの視点が適用できる。Kasser & Ryan (1993, 1996)によれば、自己成長、社会貢献、健康維持といった「内発的将来目標(intrinsic goals)」と呼ばれる目標群を目指すことが、第一の精神的健康に加えて、第二の学習動機づけにも結びつくことも明らかにされている。以下、これまで直接的に明らかにされてきた、将来目標と(1)精神的健康および(2)学習動機づけとの関係について述べる。その上で、(3)適切な進路(職業)選択との関係については、既存研究より得られる間接的な示唆について述べる。

(1) 将来目標と精神的健康との関係 人間は自らの行動を自ら決定する時に最もよく動機づけられるとする自己決定理論によれば、精神的健康の維持向上のためには、自律性、有能感、関係性の欲求といった基本的心理欲求(basic psychological needs)の充足が重要であるとされる(Ryan & Deci, 2000)。そして、目標内容理論においては基本的心理欲求との関係から「将来目標」³⁾を、①自己成長、

良い人間関係の構築、社会貢献、健康維持といった「内発的将来目標(intrinsic goals)」と、②金銭的成功、名声獲得、外見的魅力などといった「外発的将来目標(extrinsic goals)」という二つの目標群に分け対比させて論じている。そして、内発的将来目標は基本的心理欲求を直接的に充たすことができるため、内発的将来目標の追求は自己実現傾向やバイタリティといった精神的健康に正の影響を示すことが明らかにされている。それに対して、外発的将来目標は間接的にしか基本的心理欲求を充たすことが出来ないため、外発的将来目標の過度な追求は精神的健康に負の影響を及ぼす危険性があることが、不安や抑うつといった認知・感情に関する側面や、アルコールやタバコの過剰摂取および薬物乱用といった行動に関する側面の、両面から明らかにされている(Duriez, Vansteenkiste, Soenens, & De Witte, 2007; Schmuck, Kasser, & Ryan, 2000; Vansteenkiste, Duriez, Simons, & Soenens, 2006; Williams, Cox, Hedberg, & Deci, 2000)。

(2) 将来目標と学習動機づけとの関係 内発的将来目標の適応的な影響は、精神的健康のみならず、学習動機づけにおいても、主にVansteenkisteらの一連の研究により明らかにされている。

例えば、Vansteenkiste, Simons, Lens, Sheldon, & Deci (2004)では、保育者を目指す大学生200名を対象に調査を行った。そこでは、リサイクルに関する講習を行う際、「将来、子どもたちに環境保護への取り組み方を教えるのに役立つでしょう」といった内発的将来目標を教示した群は、「将来、資源を再利用することによってお金を節約する方法を教える際に役立つでしょう」といった外発的将来目標を教示した群に比較して、自律的動機づけ、深い認知的処理を伴う学習方略の使用、学習の持続性、試験の成績といった面で適応的な学習動機づけが高くなったことを明らかにしている。さらに、一般的に良い学習成果に結びつかないとされる浅い認知的処理を伴う学習方略の使用、課題遂行時のストレスといった不適応的な学習動機づけが低くなったことを明らかにしている。

そしてこの結果は、内発的将来目標を促す教示が、課題の本質的内容に目を向けさせその熟達に主要な関心を持つという、課題関与的またはマスタリー目標的な目標志向性を促すことによると考えられている(Vansteenkiste, Simons, Lens, Soenens, Matos, & Lacante, 2004; Vansteenkiste, Simons, Soenens, & Lens, 2004)。

(3) 適切な進路(職業)選択と将来目標との関係 適切な進路(職業)選択活動と将来目標との関

3) 英語では“goals”, “life goals”, “aspirations”または特に長期的に維持されることを強調して“value”と表記する。これらの英語を日本語に直訳すれば、「目標」「人生目標」または「価値」となる。この中で、より持続性を有するという点では「価値」の側面が強く(ゴードン・菊池, 1975)、また将来に向かって目指されるものという意味合いでは「目標」という側面も有すると考えられる。この点、本研究では主な対象が、これから将来に向かって人生の目標を成熟させてゆく高校生や大学生であるので、「将来」目標と表現することとした。

係については、これまで直接的に検討されてはこなかった。しかし、Super (1957 日本職業指導学会誌 1960) が、職業と価値観との関係について、特定の価値観はある仕事を求める要因となると指摘しているように、人生全般にわたる目標である将来目標は、進路（職業）選択活動の適応・不適応にも影響を与える可能性があると考えられる。これまで、将来目標との関係を直接的に検討した研究は少ないものの、既存研究の結果から内発的将来目標と類似した職業観を有することが質の高い進路（職業）選択活動に結びつくことが示唆されているといえる。

例えば、求職活動中の労働者の職業価値を2つの将来目標に沿って分けた Van den Broeck, Vansteenkiste, Lens, & De Witte (2010) は、内発的将来目標を志向する職業価値観は、職業訓練や報酬への柔軟性を持つ適応的な求職活動につながる一方で、外発的将来目標を志向する職業価値観は、職業訓練や報酬への柔軟性を低下させ、硬直した求職活動を招くことを示している。また本邦でも同様に、小川 (2001) が、ビジネス系女子短大生 (102名) を対象に、職業価値観と職業レディネスとの関係について検討した結果、内発的将来目標に類似する「仕事に対する前向き志向」や「社会との関わり重視」といった職業価値観が職業レディネスと正の相関を示し、外発的将来目標に類似する「上昇志向と他者評価志向」といった職業価値観が職業レディネスに結びつかないことを明らかにしている。さらに、若松 (2005) は、進路不決断の二類型 (undecided 型と indecisive 型) のうち、強い特性的な不安と結びつく indecisive 型の学生について検討したところ、職業に対する「興味や好みの模索」といった内発的将来目標的な関心が、もっとも大きな影響を進路選択の「快適さ」(「納得感」や「非心配感」) に与えることを明らかにしている。

以上、これらの諸研究は将来目標と進路（職業）選択との関係性を、直接的に検討したものではないが、内発的将来目標と類似した職業観を有することが外発的将来目標と類似した職業観に比較して、より課題の本質的内容である職業の具体的イメージや内容に目を向けることにつながり、積極的な進路（職業）選択活動に結びつくことを示唆していると考えられる。

以上の検討から、将来目標は (1) 精神的健康と (2) 学習動機づけに関係することが明らかにされており、さらに (3) 適切な進路（職業）選択活動に対する影響についても内発的将来目標追求の有効性が間接的に示唆されていると考えられる。

これらの点から、生徒・進路指導上、Kasser & Ryan (1993, 1996) の将来目標の視点は有効であると考えられる。

しかしながら、本邦においては、目標内容理論に沿った内発的—外発的といった二元的な将来目標尺度は作成されておらず、したがって本邦における既存研究も、進路（職業）選択活動と将来目標との関係を直接的に検討したものは存在しない。

そこで本論文では、特に適切な進路（職業）選択活動に資するという観点から、生徒・進路指導時に目指されるべき将来目標について示唆を得るために、まず就学の最終段階として、進路（職業）選択課題に直面している大学生を対象に質問紙調査を行い、将来目標尺度を作成し信頼性と妥当性を検討することを第一の目的とする (研究 I)。

さらに、第二の目的として、将来目標が適切な進路（職業）選択活動に寄与するのかを検討する (研究 II)。このため、①具体的な志望職業の有無、②キャリアへの興味・関心、③職業未決定感、④人生的進路課題自信、という四点との関係について検討する。

具体的には、内発的将来目標を主にもつことが外発的将来目標を主にもつことに比べて、より課題内容の本質的理解に目を向けることに結びつくと考えられることから、数年以内に具体的な進路選択を迫られる短大・大学生が、まず①にてしっかりと具体的な目標を持っているか (研究 II の分析 1) を検討する。次に、②にて志望職業への就職または探索に向けて積極的な情報収集へと動機づけられているかを検討する。さらに、③にて進路（職業）選択活動が、単に世間体や強制によるのではなく自我同一性を意識して考慮されているか、という三点において、将来目標と進路選択という「課題」の本質的理解との関係を検討する。そしてその上で、④にてそのような進路（職業）選択活動が、より広範に人生全般の進路選択に関する自信につながっているか (②から④まで、研究 II の分析 2) を検討する。

研究 I

目的

本研究の目的は、目標内容理論に基づき、将来目標尺度 (大学生版) を作成することである。

方法

調査参加者および調査時期 調査は、以下二群の主に教職課程を専攻する A 大学の学生であった。平成 20 年 7 月に調査を行った第一群は 1-3 年生 189 名

(1年生:78名, 2年生:84名, 3年生:27名で, 男性:72名, 女性:117名。平均年齢19.15歳, $SD=1.64$)で, また平成20年11月に調査を行った第二群は, 2年生311名(男性:156名, 女性:153名, 不明2名。平均年齢20.27歳, $SD=0.78$)であった。

使用尺度 ①将来目標尺度(大学生版):Kasser & Ryan (1993, 1996)を参考に, 内発と外発の二つの将来目標を設定した。まず, 内発的将来目標は, 人間の本性に深く根差しており基本的心理欲求を直接充足するような将来目標であり, 「将来, さらに多くのことを学び成長すること(自己成長)」や「将来, 困っている人を助けること(社会貢献)」など10項目で構成された。次に, 外発的将来目標は, 人間の本性に深く根差さず表面的で, 基本的心理欲求を間接的にしか充足しないか, または欲求充足を妨げる危険性のあるような将来目標であり, 「将来, 世の中に自分の名前が知れわたること(名声獲得)」や「将来, お金持ちになること(金銭的成功)」といった8項目で構成された。そして「以下に, 様々な将来の人生目標(将来目標)が書いてあります。以下の将来目標を達成することはあなたにとってどのくらい重要だと思いますか。」と教示した上で, 「まったく重要でない(1点)」、「あまり重要でない(2点)」、「どちらかといえば重要でない(3点)」、「どちらともいえない(4点)」、「どちらかといえば重要だ(5点)」、「だいぶ重要だ(6点)」、「とても重要だ(7点)」までの7件法にて回答を求めた。②展望主義尺度:白井(1997)の時間的信念尺度のうち, 将来のより高い目標のために満足を遅延し努力する態度を計測する尺度である。回答は「反対(1点)」から「賛成(5点)」までの5件法で求めた。この尺度は「自分の夢の実現のために頑張るのが人生だ」など7項目より構成される。鈴木・落合・櫻井(2009)の結果より, 内発的将来目標の方がより適応的な時間的展望を有することが明らかにされているため, 内発的将来目標と正の相関にあることが予想される。③普段の学習時間:「普段, あなたは学校の授業をのぞいて, 一日何時間くらい勉強をしていますか。」と家庭での学習時間を直接, 時間数でたずねた。④テスト前の学習時間:「テスト前の一週間では, あなたは学校の授業をのぞいて, 一日何時間くらい勉強をしますか。」と, テスト前の家庭での学習時間を直接, 時間数でたずねた。Vansteenkiste, Simons, Lens, Sheldon, & Deci(2004)などより, これら二種類の学習時間は, 適応的な学習行動と関係するとされる内発的将来目標と正の相関がみられることが予想される。⑤内発的動機づけ尺度:「大学生学習動機づけ尺度」(岡田・中谷,

2006)の「内発」下位尺度項目のうち, 「好奇心が満たされるから」など, 因子負荷量の高い上位5項目によって構成された。「大学の講義やサークル活動, 資格試験など, 日常において様々なことを学んだり, 勉強したりすることについておたずねします。あなたはそのような学習・勉強などの活動をどのような理由で行っていますか。」と教示した上で, 「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」の5段階でたずねた。内発的動機づけは, 同じ内発性を有する点から, 内発的将来目標と正の相関を有することが予想される。⑥描写的価値尺度(PVQ: Portrait Values Questionnaire⁴⁾)(Schwartz, Melech, Lehmann, Burgess, & Harris, 2001):自己の持つ価値観に関する主観的な認知を計測する尺度である。「自己超越的価値(self-transcend value)対自己促進的価値(self-enhancement value)」という二元的な価値分類を用いて尺度得点を合算平均した。すなわち, 「能力を示す事が私にとって, とても重要です」といった自分自身の相対的成功や他者への支配力の向上等を表す価値である自己促進的価値尺度(20項目)と, 「周りの人を助けることが私にとって, とても重要です」といった他者の幸福や福祉を強調する価値である自己超越的価値尺度(self-transcend value:20項目)の二下位尺度より構成された。2つの将来目標との関係では, 概念的に, 内発的将来目標は社会的貢献を内容として含んでいることから自己超越的価値と正の関係にあると予想される一方で, 外発的将来目標は自らの地位や名声を重視する価値であるため自己促進的価値と正の関係にあると予想される。

4) 本尺度PVQは, EU委員会枠組みプログラムを通じてEU域内全域で行われている「ヨーロッパ社会調査(European Social Survey)」で採用されている価値尺度SVS(Schwartz value survey)を, 非欧州諸国および児童向け(欧州諸国の一般的な教育を受けていない者ということ)に改訂したものの日本語版である。なお本尺度の日本語版は, 作成者Schwartz教授から第一著者が直接提供を受けたものである。教授によれば, 本尺度日本語版はバックトランスレーションの手続きを経たものとのことである。原尺度は「ここでは簡単に色々なタイプの人が記述されています。それぞれの記述を読み, その人があなたにどれくらい似ているかそれとも似ていないかを右の箱の中にX印を付ける方法で示して下さい。」と教示し, その類似度を答えさせる尺度である。しかし, 事前の調査により「かえって分かりづらい」との指摘を多数受けた。その結果をもとに「あなたにとって以下の記述はどの程度, 当てはまると思いますか。」と自分自身に対しての類似度を問う尺度とした。

なお、使用尺度中、①③④は第一群と第二群の全員が、②⑤は第2群の約半数が、⑥は第一群の全員が回答した。

結果と考察

因子分析および信頼性について 将来目標尺度について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、Table 1のように2因子解を得た。

第一因子に高い負荷を示す8項目は「将来、世の中に自分の名前が知れわたること」や「将来、お金持ちになること」など名声獲得や金銭的成功といった外発的将来目標を示す内容であるため、想定通りこれら8項目で「外発的将来目標」下位尺度を構成した。同様に第二因子に高い負荷を示す10項目は「将来、よりよい社会を実現するために働くこと」や「将来、さらに多くのことを学び成長すること」など社会貢献や自己成長といった内発的将来目標を示す内容であるため、想定通りこれら10項目で「内発的将来目標」下位尺度を構成した。2つの下位尺度のそれぞれについて、 α 係数を計算したところ外発的将来目標は $\alpha = .83$ 、内発的将来目標尺度は α

$= .86$ であった。以上から、両下位尺度とも一定の信頼性を有することが明らかにされた。

妥当性について 2つの将来目標下位尺度と関連変数との相関係数を調査群ごとに算出した (Table 2および Table 3)。その際、2つの将来目標間の相関を計算したところ、内発的将来目標と外発的将来目標との間に有意な正の相関 ($r = .20, p < .001$) が見られた (Table 2)。このため、関連変数に対する二つの将来目標の独自の関係性を明らかにするため、内発的将来目標の場合は外発的将来目標を制御して、外発的将来目標の場合は内発的将来目標を制御して偏相関係数を計算し、各調査分の結果を統合して示した (Table 4)。

その結果、まず内発的将来目標は、展望主義 ($pr = .33, p < .001$)、普段の学習時間 ($pr = .35, p < .001$)、テスト前の学習時間 ($pr = .09, p < .10$)、内発的動機づけ ($pr = .16, p < .05$)、といった肯定的な学習関連変数と正の偏相関を有することが分かった。これに対して、外発的将来目標は、いずれの肯定的な学習関連変数とも有意とならなかった。これらは内発的将来目標が適応的な学習と関係し、外発

Table 1
「将来目標尺度 (大学生版)」の因子分析結果

項目	I	II	共通性
第I因子 外発的将来目標 ($\alpha = .88$)			
将来、世の中に自分の名前が知れわたること。	.89	-.05	.75
将来、新聞やテレビに自分の名前が登場すること。	.86	-.07	.68
将来、有名になること。	.81	.03	.67
将来、注目を集めるようなことをすること。	.80	.04	.71
将来、お金持ちになること。	.65	-.13	.44
将来、高収入な職に就くこと。	.51	.04	.43
将来、自由になるお金がたくさんあること。	.50	.03	.35
将来、たくさんの人に尊敬されること。	.45	.32	.40
第II因子 内発的将来目標 ($\alpha = .86$)			
将来、よりよい社会を実現するために働くこと。	-.03	.77	.61
将来、困っている人を助けること。	-.07	.75	.57
将来、ほかの人の生活を良くする手助けをすること。	-.16	.65	.52
将来、さらに多くのことを学び成長すること。	.00	.63	.43
将来、本当の自分を知り、受け入れること。	.01	.61	.37
将来、世の中をより良くすること。	.09	.60	.61
将来、自分自身の人生に責任をもてること。	-.07	.59	.45
将来、人生を自らの力で選び取ること。	.03	.57	.30
将来、社会や国に貢献 (こうけん) すること。	.17	.53	.47
将来、自分なりに意義 (いぎ) のある生き方をすること。	.06	.52	.37
因子間相関	.23	-	

(注) 主因子法・プロマックス回転後の結果を示す。

的将来目標は関係しないとする Vansteenkiste, Simons, Lens, Soenens, Matos, & Lacante (2004) などの知見と整合し、概ね予測と合致する結果であった。

また、描写的価値尺度との関係を検討すると (Table 3, Table 4), 内発的将来目標は、自己促進的価値と有意な正の偏相関がみられず、自己超越的価値とのみ有意な正の偏相関 ($pr = .65, p < .001$) が見られた。これに対して外発的将来目標は、自己促進的価値と正の偏相関 ($pr = .36, p < .001$), 逆に自己

超越的価値と負の偏相関 ($pr = -.17, p < .05$) が見られた。これも、二つの将来目標の内容から予想される関係と一致している。

以上より「将来目標尺度 (大学生版)」は一定の妥当性を有すると考えられる。

研究 II

目的

本研究の目的は、将来目標が適切な進路 (職業)

Table 2
各尺度の α 係数と尺度間の相関係数 (1)

	得点範囲	M	SD	α 係数	1	2	3	4	5
1 内発的将来目標	1-7点	5.36	0.98	.86	—				
2 外発的将来目標	1-7点	3.98	1.23	.83	.20 ***				
3 展望主義	1-5点	3.94	0.53	.85	.27 ***	.14 *			
4 普段の勉強時間		2.31	0.89		.36 ***	.08	.23 ***		
5 テスト時の勉強時間		4.54	2.13		.11 *	.10 †	.09	.02	
6 内発的動機づけ	1-5点	3.63	0.71	.82	.17 *	.08	—	.15 †	.03

注1) † $p < .10$, * $p < .05$, *** $p < .001$

注2) Nは、展望主義=157, 内発的動機づけ=155, それ以外が310である。

注3) 各変数の得点は7件法 (1点から7点まで) による。

Table 3
各尺度の α 係数と尺度間の相関係数 (2)

	M	SD	α 係数	1	2	3
1 内発的将来目標 ^a	5.17	1.05	.86	—		
2 外発的将来目標 ^a	3.46	1.01	.83	.30 ***		
3 自己促進的価値 ^b	3.75	0.90	.84	.19 **	.39 ***	
4 自己超越的価値 ^b	2.93	0.82	.84	.64 ***	.07	.29 ***

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注2) N=188-189

注3) aは7件法 (1点から7点), bは5件法 (1点から5点) である。

Table 4
将来目標と各変数との相関・偏相関係数

	N	内発的将来目標	外発的将来目標
外発的将来目標	498	.22 ***	—
展望主義	157	.33 ***	.07
普段の学習時間	310	.35 ***	.03
テスト前の学習時間	310	.09 †	.08
内発的動機づけ	155	.16 *	.06
自己促進的価値	188	.08	.36 ***
自己超越的価値	189	.65 ***	-.17 *

注1) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注2) 外発的将来目標と内発的将来目標との間の単純相関係数である。それ以外は、互いの将来目標を制御した上での偏相関係数である。

選択活動に資するのかを検討するため、①具体的な志望職業の有無、②キャリアへの興味・関心、③職業未決定感、④人生的進路課題自信、という四点との関係について検討することにある。このうち①については分析1で、②については分析2にて検討する。

方法

調査参加者および調査時期 調査参加者は、以下の三つの参加者群より構成される。第一群は、平成22年12月に調査を行った4年制大学の1, 2, 3, 4年生、および短期大学の1, 2年生の合計815名(男性355名, 女性460名。平均年齢19.46歳, $SD = 2.14$)であった⁵⁾。第二群は、平成22年6月から7月にかけて調査を行った短期大学および4年制大学の1年生で計210名(男性62名, 女性148名。平均年齢18.61歳, $SD = 1.02$)であった。第三群は、平成21年7月~11月に調査を行ったA大学の1, 2, 3, 4年生の419名(男性197名, 女性222名, 平均年齢20.00歳, $SD = 0.94$)および平成22年2月に調査を行った南関東のB大学の2, 3, 4年生56名(男性26名, 女性30名, 平均年齢20.27歳, $SD = 0.99$)の計475名であった⁶⁾。

使用尺度 ①将来目標尺度(大学生版):研究Iにて作成された尺度であり、内発的将来目標と外発的将来目標の二下位尺度より構成される。本尺度には第一・二・三群が回答した。②志望職業名:「将来つきたい職業として、今考えているものがあれば、教えてください。」として、自由に志望職業名を記入するように求めた。本研究においては、記述の内容ではなく記述の有無に着目することとし、記述がある場合を志望職業「記述あり」、記述がない場合を「記述なし」とした。本質問には第一・二群が回答した。③キャリアへの興味・関心尺度(しごと観育成研究会, 2008):キャリアへの興味・関

心の程度を測る尺度である。「今、機会があれば仕事を経験してみたいと思う」および「仕事についてもっと知りたいと思う」の2項目について、「そう思わない(1点)」から「そう思う(5点)」の5段階にて回答を求めた。本尺度には第二群が回答した。④人生的進路課題自信度尺度:坂柳・清水(1990)によって作成された発達過程の中で遭遇する様々な進路課題への取り組みの自信度を計測する尺度であり、各4項目より構成される「教育的進路課題」「職業的進路課題」「人生的進路課題」の3下位尺度よりなる。このうち本研究では、人生や生き方の選択と適応に関する進路課題への自信を計測する「人生的進路課題」下位尺度を使用した。本尺度は「人生や生き方を知るために必要な情報・資料を自分で集めること」など4項目に対して、「自信がない(1点)」から「自信がある(5点)」の5段階にて回答を求めたものである。本尺度には第二群のうち質問紙のランダム配布により約半数が回答した。⑤職業未決定尺度:下山(1986)によって作成された職業未決定状態を計測する3件法の尺度である。以下の6下位尺度より構成される。第一に職業決定が未熟なため、将来の見通しが無く職業選択に取り組みないでいる状態を示す「未熟」(6項目)、第二に職業決定に直面して不安になり情緒的に混乱している状態を示す「混乱」(8項目)、第三に職業決定を猶予して当面のところは職業について考えたくないという状態を示す「猶予」(7項目)、第四に職業決定に向かって積極的に模索している状態を示す「模索」(6項目)、第五に自らの関心や興味を職業選択に結びつけていこうとする努力をしない安易な職業決定態度を示す「安直」(7項目)、第六に職業がすでに決定していることをしめす「決定」(4項目)、である。本尺度への回答は「あてはまる(3点)」から「あてはまらない(3点)」の3段階で求められた。本尺度には第三群のうち質問紙のランダム配布により約半数が回答した。

- 5) 本参加群における各大学の内訳は、南関東東の私立A大学の法学専攻の学生を中心とする311名(男子241名, 女子70名, 平均19.03歳, $SD = 1.47$)、北関東のB短期大学の幼児教育専攻の学生を中心とする221名(男子4名, 女子217名, 平均19.18歳, $SD = 1.21$)、南関東の私立C大学の福祉や介護を専攻する学生を中心とする194名(男子80名, 女子114名, 平均20.15歳, $SD = 1.09$)、北関東の国立D大学の心理学を専攻する学生を中心とする35名(男子15名, 女子20名, 平均19.37歳, $SD = 1.29$)、南関東の私立E大学の心理学を専攻する学生を中心とする54名(男子15名, 女子39名, 平均20.65歳, $SD = 1.18$)であった。
- 6) 本参加群は、研究Iの第二群、A大学・教職課程授業(311名)分の参加者も含んでいる。

結果および考察

分析1について

先行研究(Kasser & Ryan, 1993, 1996など)で性差の影響が外発的将来目標について強いことが報告されていることから、二つの将来目標が、志望職業を持つことと、どの程度関係するかを検討するため、「志望職業の有無(“記述あり”または“記述なし”)」に加えて「性(“男性”または“女性”)」を独立変数とし、将来目標を従属変数とする 2×2 の二要因被験者間分散分析を行った(Table 5)。内発的将来目標の関する結果をFigure 1に、外発的将来目

標に関する結果を Figure 2 にそれぞれ示した。

(1) 内発的将来目標について 内発的将来目標に関する分散分析を行った結果、「志望職業の有無(「記述あり」・「記述なし」)」と「性」との交互作用が有意となった ($F(1,1020) = 13.95, p < .001$)。そのため、志望職業の「記述あり」・「記述なし」の別、および、男女別の単純主効果の検討をそれぞれに行うこととした (Figure 1)。その結果、まず志望職業の有無の効果は、男性、女性ともに有意となり (男性: $F(1,415) = 36.08, p < .001$, 女性: $F(1,605) = 4.41, p < .05$)、男女とも記述あり群の方が記述なし群に比較して有意に内発的将来目標の値が高いことが明らかになった (男性: 記述あり群 (5.55点) > 記述なし群 (4.98点), 女性: 記述あり群 (5.45点) > 記述なし群 (5.30点))。次に性の効果は、記述なし群においてのみ有意となり ($F(1,363) = 11.53, p < .001$)、女性 (5.30点) の方が男性 (4.98点) に比較して有意に内発的将来目標の値が高いことが明らかになった。

(2) 外発的将来目標について 外発的将来目標においても、「志望職業の有無」と「性」との交互

作用が有意となった ($F(1,1020) = 4.16, p < .05$)。そのため、志望職業の有無別および男女別の単純主効果の検討を行った (Figure 2)。その結果、志望職業の有無の効果は女性においてのみ有意となり ($F(1,605) = 3.93, p < .05$)、記述あり群 (3.66点) の方が記述なし群 (3.85点) に比較して有意に外発的将来目標の値が低いことが明らかになった。次に性の効果は、記述あり群においてのみ有意となり ($F(1,657) = 27.33, p < .001$)、男性 (4.17点) の方が女性 (3.66点) に比較して有意に外発的将来目標の値が高いことが明らかになった。

以上の結果より、内発的将来目標について、男女とも志望職業の記述がある場合に内発的将来目標の得点が有意に高いことが明らかにされた。この結果は、志望職業の具体化(「志望職業の有無」)が内発的将来目標の上昇と結びつくことを示すものである。すなわち、主に学習領域において Vansteenkiste らの行った一連の研究によって明らかにされてきた内発的将来目標の性質、すなわち課題の本質的内容に目を向けその熟達に主要な関心を持つという課題関与的またはマスタリー目標志向的な性質が、キャ

Table 5
志望職業の有無および性別による将来目標の分散分析結果

志望職業記述の有無	記述なし		記述あり		合計		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
性別							
<i>N</i>	201	164	216	443	417	607	
内発的将来目標	<i>M</i>	4.98	5.30	5.55	5.45	5.27	5.41
	<i>SD</i>	1.05	0.76	0.90	0.76	1.02	0.76
外発的将来目標	<i>M</i>	4.04	3.85	4.17	3.66	4.10	3.71
	<i>SD</i>	1.16	1.06	1.39	1.03	1.29	1.04

注1) * $p < .05$, *** $p < .001$

注2) 各変数の得点は7件法(1点から7点まで)による。

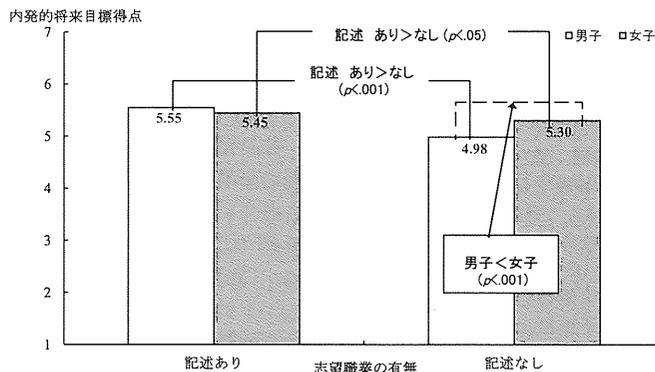


Figure 1. 内発的将来目標の交互作用

リアの領域においても見られることを、予想通り示したものと考えることができる。

分析2について

二つの将来目標の性質を、キャリアへの興味・関心、社会的比較、職業未決定、人生進路課題自信との関係から明らかにするために、相関・偏相関係数を計算した (Table 6)。

(1) キャリアへの興味・関心との関係 内発的将来目標は「今、機会があれば仕事を体験してみたいと思う」および「仕事についてもっと知りたいと

思う」のいずれの項目とも、有意な正の偏相関が見られた (それぞれともに $pr = .16, p < .05$)。これに対して、外発的将来目標は相関および偏相関とも有意とならなかった (それぞれ $pr = -.05, n.s., pr = -.04, n.s.$)。この結果を、先の分散分析 (分析1) でみられた、内発的将来目標と具体的な志望職業記述の有無との関係と合わせて考えると、課題内容の本質的理解や課題遂行の熟達に主要な関心があるという内発的将来目標のマスタリー目標志向的な性質が、学習動機づけのみならずキャリア動機づけ領域におい

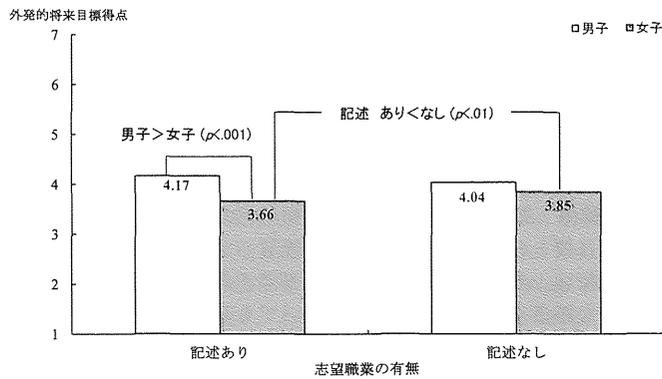


Figure 2. 外発的将来目標の交互作用

Table 6
将来目標とキャリア動機づけ諸変数との関係

変数	得点範囲	M	SD	α	内発的将来目標		外発的将来目標	
					r	pr	r	pr
1 内発的将来目標	1-7点	5.36	0.98	.85				
2 外発的将来目標	1-7点	3.98	1.23	.85	.30 ***			
3 今機会があれば仕事を体験してみたいと思いますか	1-5点	4.20	0.93	-	.15 *	.16 *	.00	-.05
4 仕事についてもっと知りたいと思いますか	1-5点	4.47	0.78	-	.15 *	.16 *	.01	-.04
5 人生的進路課題自信	1-5点	3.11	0.89	.85	.33 **	.24 *	.38 ***	.32 **
6 職業未決定尺度	1-3点							
模索		2.30	0.42	.65	.33 ***	.30 ***	.17 **	.10
決定		1.66	0.54	.72	.04	.04	-.03	-.04
未熟		2.03	0.55	.81	-.11	-.13 *	.11 †	.14 *
混乱		2.11	0.41	.70	-.03	-.08	.17 **	.19 **
猶予		1.64	0.43	.72	-.10	-.13 †	.11 †	.14 *
安直		1.82	0.41	.68	-.12 †	-.17 *	.18 **	.21 **

注1) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注2) "pr" とは、2つの将来目標のうち内発は外発を、外発は内発ををそれぞれ制御した従属変数との偏相関係数のことである。

注3) Nはそれぞれ、変数3, 4, 5が214名、変数6が108名、変数7が234名である。

でも、予想通り示されたものと考えることができる。また、外発的将来目標については、これも分散分析の結果と合わせて考えると、内発的将来目標に比較して、志望する仕事への具体的なイメージに結びつかず、また具体的な仕事内容について知り経験してみたいと思うことと、あまり関係しないという傾向が示唆されたと考えることができる。

(2) 人生的進路課題自信との関係 内発的将来目標と正の有意な偏相関が見られたのみならず ($pr=.24, p<.05$)、外発的将来目標とも有意な正の偏相関を示すことが分かった ($pr=.32, p<.01$)。この結果は、内発的将来目標、外発的将来目標ともに、人生全般に関する進路課題への自信につながることを示している。内発的将来目標については予想通りであったといえるが、他方で外発的将来目標との間で、内発的将来目標よりもむしろ大きな正の偏相関がみられたことは、既存研究と異なる予想外の結果であり、注目に値すると考えることができる。

(3) 職業未決定尺度との関係 職業未決定尺度の各下位尺度と、2つの将来目標との関係を検討した。その結果、内発的将来目標は、外発的将来目標を制御した偏相関で、否定的な職業決定状態とされる「猶予」($pr=-.13, p<.10$) および「安直」($pr=-.17, p<.05$) と負の偏相関が見られ、「混乱」とは有意な偏相関が見られなかった ($pr=-.08, n.s.$)。また、肯定的な職業決定状態である「模索」とは正の有意な偏相関が見られた ($pr=.30, p<.001$)。これらの結果は、職業決定においても、内発的将来目標がより成熟したアイデンティティの確立へとつながるといふ肯定的な性質を、予想通り示したといえる。

次に、外発的将来目標は、いずれも否定的な職業決定状態とされる「未熟」($pr=.14, p<.05$)、「混乱」($pr=.19, p<.01$)、「猶予」($pr=.14, p<.05$)、「安直」($pr=.21, p<.01$) と有意な正の偏相関が見られる一方で、肯定的な職業決定状態である「模索」($r=.17, p<.01$) ととも正の有意な相関が見られた。ただし、この「模索」との相関は、内発的将来目標を制御した偏相関を計算した場合には有意とならなかった ($pr=.10, n.s.$)⁷⁾。これらの結果は、外発的将来目標が、原則的には、アイデンティティの確立という点から否定的とされる職業未決定と関係すること示したと考えることができる。しかし他方で、外発的将来目標は、肯定的とされる職業未決定(「模索」)を、内発的将来目標と関係しながら促す可能性もあると

いう両義的な側面を持つことを示唆していると考えられる。

全体的な考察

本論文においては、まず研究Ⅰにて信頼性と一定の妥当性のある「将来目標尺度(大学生版)」を作成した。

その上で、研究Ⅱにおいて将来目標が適切な進路(職業)選択活動と関係するのかを検討した。その結果、内発的将来目標は、志望職業の具体化(「志望職業の有無」)やキャリアへの興味・関心と結びつくことが示されるなど、具体的な志望職業のイメージの形成やその深化と関係することが示唆され、加えて職業未決定尺度との関係より、より成熟したアイデンティティの確立、さらには人生全般の進路課題に自信(人生的進路課題自信)を持つことにつながる可能性が示唆された。これは、主に学習領域において明らかにされてきた内発的将来目標の性質、すなわち適応的な課題関与またはマスタリー目標志向的な性質が、キャリアの動機づけ領域においても見られることを予想通り示唆したものと考えられる。

したがって、本邦の生徒・進路指導において、学生および児童生徒に対して、内発的将来目標を追求するような働きかけを行うことが重要であると考えられる。例えば、朝日(2004)は、短期大学生に対する進路教育プログラムの中で、働く意味を考えたり、働く欲求を高めたりすることを第一要素に挙げているが、こうした取り組みの中で外発的将来目標ではなく内発的将来目標を促進することが必要になるであろう。

ただ、その一方で、外発的将来目標は一概に否定的な側面のみを有しているわけではないことも明らかとなった。すなわち、確かに外発的将来目標は、キャリアへの興味・関心とは正の有意な相関を有さず、また否定的といわれる職業未決定尺度と正の偏相関を有するなど、否定的な側面を示した。ただその一方で、人生的進路課題自信ではむしろ内発的将来目標より高い正の偏相関を有するなど、肯定的な側面も有することが示された。このような、外発的将来目標が、“常に”否定的とはいえないのではないかとすることを示唆する結果は、外発的将来目標が過度の社会的比較に結び付く結果、精神的健康に否定的な影響を及ぼすとする海外の目標内容理論研究が一貫して示してきた結果と異なっている(Duriez et al., 2007; Kasser & Ryan, 1993, 1996; Patrick, Neighbours, & Knee, 2004など)。

7) なお内発的将来目標と外発的将来目標との相関は $r=.23$ ($p<.001$) であった。

これら本研究で得られた外発的将来目標の肯定的な機能の可能性に関しては、類似の報告をしていると考えられる先行研究が存在する。例えば、Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981) は、外発的将来目標と類似する物質主義には、①他の個人的目標や人生目標達成のための手段としての物質主義である「手段的物質主義 (instrumental materialism)」と、②社会的地位を得たり、嫉妬や他者の称賛を生じさせたりするような物質主義である「終局的物質主義 (terminal materialism)」という2つの物質主義 (外発的将来目標) があるとし、このうち①の手段性を有している物質主義 (外発的将来目標) は、必ずしも不適応的なものではないことを明らかにしている。また、Srivastava, Locke, & Bartol (2001) も、外発的将来目標が手段として目指す目的が、安全、家族、市場価値、誇りといった適応的な目的によるものであれば、精神的健康に否定的な影響を及ぼさずに済む可能性があることを示唆している。先述した朝日 (2004) において報告されている、短大卒業後に就職する理由のうちの「進学したいが、経済的に無理だから」、「早く親から経済的に自立したいから」、「家計を助けたいので」といった理由は、これに相当すると考えられる。

このように、外発的将来目標もそれ自体を終局的な目標としてではなく、それが適応的な終局目標に到達するための手段として追求されるのであれば、必ずしも否定的な効果を及ぼさないことが示唆される。

この点は、例えば、「将来、自分の夢に向かってすすむ (自己成長) ためにも、まずは一定の収入を得られるように (金銭的成功) 進路選択をしてはどうだろうか」などといった、より堅実な将来設計に基づいた、さらなる生徒・進路指導への示唆を得られる可能性もあると考える。よって、今後、既存の目標内容理論の研究に加えて、手段として追求される外発的将来目標が適応的な役割を果たすための条件や場面について検討していきたい。

引用文献

- 朝日素明 (2004). 大学における進路教育と学生の進路選択に関する研究：短期大学生の意識からみる進路指導実践の評価 学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要, **13**, 33-45.
- Csikszentmihalyi, M., & Rochberg-Halton, E. (1981). *The meaning of things: Domestic symbols and the self*. London: Cambridge University Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic*

motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum Press.

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The 'what' and 'why' of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, **11**, 227-268.
- Duriez, B., Vansteenkiste, M., Soenens, B., & De Witte, H. (2007). The social costs of extrinsic relative to intrinsic goal pursuits: Their relation with social dominance and racial and ethnic prejudice. *Journal of Personality*, **75**, 757-782.
- ゴードン, L. V.・菊池章夫 (1975). 価値の比較社会心理学 川島書店
- Kasser, T., & Ryan, R. M. (1993). A dark side of the American dream: Correlates of financial success as a central life aspiration. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 410-422.
- Kasser, T., & Ryan, R. M. (1996). Further examining the American dream: Differential correlates of intrinsic and extrinsic goals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 280-287.
- Husman, J., & Lens, W. (1999). The role of the future in student motivation. *Educational Psychologist*, **34**, 113-125.
- 文部科学省・中央教育審議会 (1996). 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
- 文部科学省 (2010). 生徒指導提要 教育図書株式会社
- 岡田 涼・中谷素之 (2006). 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響：自己決定理論の枠組みから 教育心理学研究, **54**, 1-11.
- 小川待子 (2001). ビジネス系短期大学における職業教育に関する考察：職業価値観と職業レディネスの観点から 東京経営短期大学紀要, **9**, 55-70.
- Patrick, H., Neighbors, C., & Knee, C. R. (2004). Appearance-related social comparisons: The role of contingent self-esteem and self-perceptions of attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **30**, 501-514.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 坂柳恒夫・清水和秋 (1990). 中学生の進路課題自信度と性役割自己概念との関連 進路指導研

- 究, 11, 18-27.
- Schmuck, P., Kasser, T., & Ryan, R. M. (2000). Intrinsic and extrinsic goals: Their structure and relationship to well-being in German and U.S. college students. *Social Indicators Research*, 50, 225-241.
- Schwartz, S. H., Melech, G., Lehmann, A., Burgess, S., & Harris, M. (2001). Extending the cross-cultural validity of the theory of basic human values with a different method of measurement. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 32, 519-542.
- しごと観育成研究会 (2008). 高校生の“しごと観”と“進路選択”に関する調査 —全国高校共同調査「進路や就職に関するアンケート」結果—しごと観育成研究会
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.
- Srivastava, A., Locke, E. A., & Bartol, K.M. (2001). Money and subjective well-being: It's not the money, it's the motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 959-971.
- Super, D. E. (1957). *The psychology of career*. Harper & Brothers. (スーパー, D. E. 日本職業指導学会 (訳) (1960). 職業生活の心理学 誠信書房)
- 鈴木高志・落合基文・櫻井茂男 (2009). 将来目標尺度 (中学生版) の作成 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, 617.
- Van den Broeck, A., Vansteenkiste, M., Lens, W., & De Witte, H. (2010). Unemployed individuals' work values and job flexibility: An explanation from expectancy-value theory and self-determination theory. *Applied Psychology: An International Review*, 59, 296-317.
- Vansteenkiste, M., Duriez, B., Simons, J., & Soenens, B. (2006). Materialistic values and well-being among business students: Further evidence for their detrimental effect. *Journal of Applied Social Psychology*, 36, 2892-2908.
- Vansteenkiste, M., Simons, J., Lens, W., Sheldon, K. M., & Deci, E. L. (2004). Motivating learning, performance, and persistence: The synergistic effects of intrinsic goal contents and autonomy-supportive contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 246-260.
- Vansteenkiste, M., Simons, J., Lens, W., Soenens, B., Matos, L., & Lacante, M. (2004). Less is sometimes more: Goal-content matters. *Journal of Educational Psychology*, 96, 755-764.
- Vansteenkiste, M., Simons, J., Soenens, B., & Lens, W. (2004). How to become a persevering exerciser? providing a clear, future intrinsic goal in an autonomy supportive way. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 26, 232-249.
- 若松養亮 (2005). 教員養成学部の進路未決定者が有する困難さの特質: 類型化と教職志望による差異の分析を通して 青年心理学研究, 17, 43-56.
- Williams G. C., Cox, E. M., Hedberg, V. A., & Deci, E. L. (2000). Extrinsic life goals and health-risk behaviors in adolescents. *Journal of Applied Social Psychology*, 30, 1756-1771.

(受稿9月28日: 受理10月30日)